



社会保障

ゆうゆうLife



がん患者やその家族、医療関係者らが、お茶を飲みながらリラックスして語り合い、病気の不安を和らげる「がん哲学外来」という試みが広がっている。国立がん研究センターによると、平成27年に新たにがんと診断された患者は推計約98万人で前年に比べ10万人増加。2人に1人ががんになる現代に、心のよりどころになると期待されている。（玉崎栄次、写真も）

対話を通じ生きる力を

がん哲学外来

同じテーブルを囲む4人に向かつて語り始めた。50歳のとき、乳がんになった。手術したが、8年後、両肺への転移が判明。肝臓や骨などにも広がり、現在は末期のステージ4。抗がん剤治療を続けながら、体調が許す限り、毎回カフェに参加している。

「家族には心配をかけたくないから、弱音や泣き言は言いたくない。でも、この場所では他人であるからこそ、率直な気持ちをはき出せる。参加し続けているうちに、自分の気持ちを整理できるようになった」

昨年4月、胃がんのステージ5と診断され、胃の3分の2を切除したという薬剤師の男性(54)＝同市緑区＝はこの日、夫婦で初めてカフェに参加した。テーブルでは、自身の病状を家族にどのように伝えるかということについて話し合った。男性には大学生の一人娘がいるが、「ありのままを全て話した」という。一方、同じテーブルの楠さんは「診断当初は2人の子供に伝えることを躊躇した」。

終了後、男性は「がん哲学外来については書かれた本を読み感銘を受けて参加した。自分と同じように闘病しているも、いろいろな考えがあることが分かった。対話を通して自分のことについて考えることができた」と話した。

「ここでは死をタブー視しない。対話をきっかけに死の恐怖や悲しみの原因を自問すると、後に残す家族の行く末や、自分がやり残したことに思いが至る。気持ちを整理することで、今できることに真摯に向き合えるのではないだろうか」とカフェの意義を説明する。



「がん哲学外来・まちなかメディカルカフェinさいたま」では、参加者らががんをめぐるさまざまなことを語り合った＝さいたま市の「さいたまメディカルタウン」

「患者が尊厳を持てる社会に」

「がん哲学外来」には、医師と患者が1対1で対話する「個別面談方式」と、医師や複数の患者らがテーブルを囲む「カフェ方式」の2通りがある。ともに、お茶を飲みながら1時間ほどの「対話」を通じ、病気の不安や悩みの解消を探るのが目的だ。

がん哲学外来は、順天堂大医学部の樋野興夫教授(62)＝病理・腫瘍学＝が平成20年に始めた。「がんでも尊厳を持って人生を生き切ることができる社会をつくりたい。『哲学』という言葉を使うことで、人間の尊厳に触れることができる」と考えた。

19年に施行されたがん対策基本法により、全国のがん拠点病院にがん相談の窓口が相次いで設置された。しかし、治療や生活支援などに関する情報提供や、傾聴に終始する窓口の対応では、「病を抱えながらどう生きていくのか」など死を意識せざるを得ないがん患者の悩みを解消するのは難しかった。

同大医学部付属順天堂医院は、樋野教授の提案で試験的に3カ月

限定でがん哲学外来を開設。無料の個別面談方式で、患者らと語り合ったところ、予約が殺到した。患者らが参加しやすいように喫茶店などに場所を移したのがカフェ方式へと発展した。



樋野興夫 順天堂大教授

「臨床の現場は、患者に病状や治療方法を説明するので手いっぱい。一方、患者側はどのようにがんに向き合いながら生きていけばいいのかわからない。対話を通じて現場と患者の間にある『隙間』を埋める存在。それががん哲学外来の役割」

25年には、樋野教授が理事長となり一般社団法人を立ち上げた。趣旨に賛同した全国の医師や看護師が中心となり、患者同士や医療関係者が語り合えるカフェ方式のがん哲学外来を主催。各地の病院や教会などを拠点に活動を広げ、北海道から九州まで全国80カ所の上る。

「私もがん哲学外来に出合ったから、地元でカフェを立ち上げるといふ行動につながられた。対話の場がさらに増えて、多くの人が元気を出すきっかけになればいい」

日本基督教団播磨新宮教会の穂積修司牧師(70)は昨年8月、「がん哲学外来メデイカルカフェin播磨」(兵庫県)を始めた。2カ月に1回、15人ほどが集まる。穂積牧師自身も24年に虫垂がんを診断され闘病中に大阪のカフェに参加した。

「患者も少なくない。一方、がん哲学外来は、患者だけでなく、家族やがんについて考える人なら誰でも、主役として参加できることが特徴だ。」